

にじむ新時代の潮流

寄稿

江川 佳秀
県立近代美術館
学芸調査課長



最後の絵師・團藍舟

県立近代美術館は、徳島市出身の絵師團藍舟（1872～1935年）を紹介する「特集 団藍舟の世界」（4月5日まで）を開いている。美術館では2013年度末に関係者から作品や下絵、画稿、遺品など約1900点が寄贈され、分類の見直しや表具などの作業を終えて企画した。調査に当たった江川佳秀学芸調査課長に團の功績や展示の見どころについて寄稿してもらった。

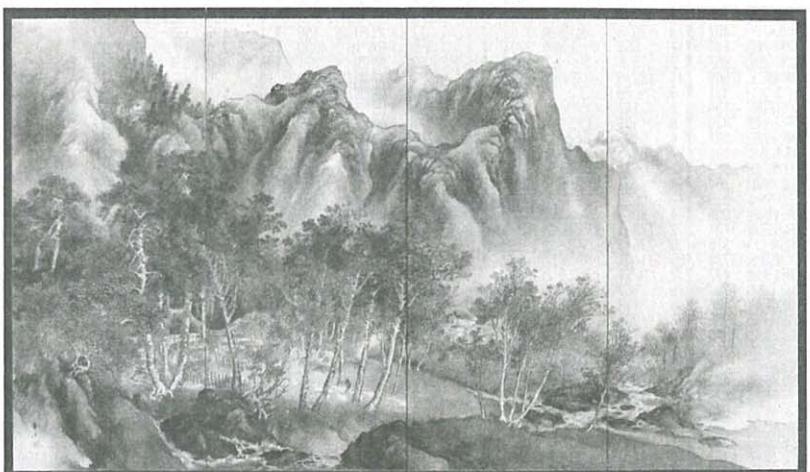
團が活躍した時代は、日本画の世界で江戸時代からの伝統を守ろうとする「旧派」と、日本画の革新を目指した「新派」がしのぎを削っていた。團は徳島市東船場生まれ。1897年ごろ上京し、江戸時代から続く画派円山派の重鎮・川端玉章に師事した。川端の高弟の一人として、旧派の風景を描いていたが、羊世界で存在感を示した人物である。

團が活躍した時代は、日本画の世界で江戸時代からの伝統を守ろうとする「旧派」と、日本画の革新を目指した「新派」がしのぎを削っていた。團は徳島市東船場生まれ。1897年ごろ上京し、江戸時代から続く画派円山派の重鎮・川端玉章に師事した。川端の高弟の一人として、旧派の風景を描いていたが、羊世界で存在感を示した人物である。

團が活躍した時代は、日本画の世界で江戸時代からの伝統を守ろうとする「旧派」と、日本画の革新を目指した「新派」がしのぎを削っていた。團は徳島市東船場生まれ。1897年ごろ上京し、江戸時代から続く画派円山派の重鎮・川端玉章に師事した。川端の高弟の一人として、旧派の風景を描いていたが、羊世界で存在感を示した人物である。

團が活躍した時代は、日本画の世界で江戸時代からの伝統を守ろうとする「旧派」と、日本画の革新を目指した「新派」がしのぎを削っていた。團は徳島市東船場生まれ。1897年ごろ上京し、江戸時代から続く画派円山派の重鎮・川端玉章に師事した。川端の高弟の一人として、旧派の風景を描いていたが、羊世界で存在感を示した人物である。

意識は江戸時代を踏襲



團藍舟「山里の秋」（1917年、日本美術協会展覧会展三等銅牌受賞）

本画とは少し趣が違う。西洋的ともいえる空間表現だ。旧派の画家ではあるが、團も新しい時代の潮流と無縁でなかったのだろう。

それに対し、遺品の一つ、旧宮家久邇宮邦彦王

から下賜された白磁の香炉は、團の伝統的な絵師としての意識を強く感じさせる。團が邦彦王の寵愛を受け自宅に招かれて陪食を賜つたり、久邇宮邸の襖絵や屏風絵を描いたりしたことは知られていた。邦彦王は数多くいた團の後援者の一人であるが、おそらく團にどうしては、それにどどまらない

い重みがあつただろう。江戸時代までの絵師にとって、職業画家として身を立てるということは、幕府や各大名、朝廷などの庇護を受け、その御用を勤めることだった。その流れをくむ旧派の画家たちが、時代が変わつても、御用絵師といふ立場を画家の理想と思いついていたことは容易に想像できる。白磁の香炉を見ていると、團には画家としての目標を達した、そのような思いがあつたのでないかと想像するのだ。

今回の展示は、所蔵作品

展示室2の全てを使って品展の一部ではあるが、60点余りの作品と資料を展示している。本格的な作品だけでなく、繰り返し描いた下絵や、修業時代に師匠の絵を書き写したもの、師匠の絵を描き写した粉本、余技として描いた挿絵や団扇絵など、多

彩な資料が並ぶ。團の画業を概観できるちょっと

した回顧展である。ぜひご覧いただきたい。